

大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義
－関西学院大学 総合政策学部 白山麓実習5年間の活動から－

**The Significance of Fieldwork as Types of Local Contribution
Activity in the University Education
－ Report on “Hakusanroku Project” for 5 years at the School
of Policy Studies, Kwansei Gakuin University－**

野 畠 章 吾

Shogo Nobata¹

はじめに

久野武教授(現名誉教授)は、関西学院大学 総合政策学部で教鞭をとった17年間で15コース以上のゼミ実習をつくった。本報告で扱う白山麓実習もそのうちの1つで、2010年度にスタートし2014年度には5年目を迎えた。

久野武教授は、実習の意義について『総合政策学部フィールドワーク活性化に向けて－久野ゼミ実習の軌跡－』²の中で詳細に記しているが、久野武教授の退職後、現在も継続している白山麓実習に関しては、その意義を改めて整理しておく必要がある。とりわけ、2014年度の白山麓実習では、地域貢献活動型フィールドワークとして実習成果を定着させること(市民参加プログラム導入と商品開発)に成功した他、同実習の複数年計画を発表した。2013年度までの白山麓実習は、実習期間中に地域貢献活動を行い、実習計画も年度ごとに更新することが前提となっていたから、これは大きな変化といえる。

本報告は、2010年度から2014年度までに行われた5回の白山麓実習の変遷を中心に記す。それにより大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義を示し、他のフィールドワークや、その計画立案の一助となることを期待する。同時に『総合政策学部フィールドワーク活性化に向けて－久野ゼミ実習の軌跡－』を補完出来れば幸いである。

I. フィールドワーク『白山麓実習』

I-1 フィールドワークとは

関西学院大学総合政策学部のWebサイトは、「社会学や人類学から始まったりサーチの手法です。みなさんはキャンパスを離れて、フィールド(研究対象の現地)を訪れ、フィールドの事情を直接観察したり、関係者から話を聞いて、問題点を明らかにして、解決策を探ります。本や講義だけでは学べない情報を直接現地で集める、これが

1 株式会社クロス クリエイティブ コア 代表取締役／市民団体ツナグ白山麓 共同代表／関西学院大学総合政策研究科リサーチ・コンソーシアム会員

2 関西学院大学総合政策学部編『K.G.りぶれっとNo.34 総合政策学部フィールドワーク活性化に向けて』関西学院大学出版会 2013(久野武が第6章以外全編にわたって執筆、筆者が第6章を執筆した)

フィールドワークです」³と説明している。

佐藤郁哉は、フィールドワークには2つの意味があるとした。現地の社会生活に参加しインフォーマントとの密接な人間関係を前提として行う、いわゆる「密着取材」的な調査(参与観察)は狭義のフィールドワークであり、配布した質問票によるサーベイ調査、一問一答でのインタビュー、その地域や組織に関係のある新聞記事のチェック、役所や資料館で統計資料を探すといったことは広義のフィールドワークであると説明している。⁴ また、三浦耕吉郎は、フィールドワークを「自由度の高い実践」と述べている。⁵ 加えて、菅原和孝は、「人類学のフィールドワークとは<他者>について少しでもわかろうとする実践である」、「人類学のフィールドワークとは、最初は謎めいた外見とともに立ち現れる『現地の人びと』の『生のかたち』をいきいきとわかることをめざす」と、著書の中でこの部分を太字で強調している。⁶ これらを整理し、フィールドワークとは何かという端的な定義づけを行うことは容易ではない。しかし、フィールドワークの使用が制限されなかったことは、結果的に様々な分野、研究機関、企業活動などにおいてフィールドワークを浸透させる要因になったのではないだろうか。そうだとすれば、フィールドワークの使用法には、実態として多様な形があるものと思われる。

したがって、本報告は、フィールドワークを関西学院大学 総合政策学部が言うような広義的なリサーチ手法、あるいは実践と捉え書き進めたい。

I-2 実習とは

本報告では、フィールドワークとは別に実習と

いう言葉が登場する。実習を国語辞典で調べると「講義などで学んだ技術や方法などを実地または実物にあたって学ぶこと」と説明されており、教育実習や介護実習というように使用されている。本報告における実習も同様で、普段のゼミで学んでいる内容、あるいは進級論文や卒業論文のテーマについて、新たなアプローチすなわち実体験からの知識習得を目指すものである。

久野武は、『総合政策学部フィールドワーク活性化に向けて－久野ゼミ実習の軌跡－』の中で、「フィールドで自ら体感すること、そして現地の問題に関連する様々なステークホルダーとの対話の機会を得ること」が実習の第1段階の目標と述べている。さらに「学生自らが受動型実習の限界を自覚し、能動型実習すなわち自主的な計画のもとに自ら問題を探り、解決策を考え、かつ、それを地元の皆さんに提案すること」を第2段階の、「活動を単発的なものに終わらせず、自ら組織化していくことで、継続的なフィールドワークの体系化を図るとともに、地元への社会貢献も果たしていくこと」を第3段階の目標とした。⁷

また、実習とフィールドワークの関係について、久野はフィールドワークをインターンシップとして意義づけ、先に述べた第1段階の目標を掲げて行う実習を受動型のインターンシップ実習としている。インターンシップ実習への参加によって、学生は現地関係者の問題意識の一端を共有することが出来、問題への対処の仕方を学ぶ。副次的には“絆効果”が大きく、学生同士、学生と受け入れ先との間には実習終了後も絆が形成され、これがその後の卒論研究を後押しするケースが見られたと述べている。しかし、実習があくまでも実習指導者の指示に従いボランティアに終始する場合や、体験がごく少数の参加者の中だけで共有さ

3 関西学院大学総合政策学部Webサイト <http://www.kg-sps.jp/fieldwork/> 2014.11.5閲覧

4 佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社 2002 66,67頁

5 好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社 2004 247頁

6 菅原和孝編『フィールドワークへの挑戦』世界思想社 2006 3,4頁

7 脚注2に同じ。合わせて久野教授の筆者への指導から。

れる場合、その効果が限定的であることを示唆した。⁸

そこで、先に述べた第2段階、第3段階の目標を達成する形態へと実習を発展させる必要が生じる。この発展形態が、フィールドへの成果の還元を追求する能動型のプロジェクト実習である。プロジェクト実習では、インターンシップとして学習あるいは調査、研究を行うことに加えて、そこ

で発見された問題を解決するために学生自らが提案し実行することを求める。提案の実行は実験でもあり、調査研究としての価値が高い。同時にフィールドの問題解決を企図することから、プロジェクト実習は地域貢献活動ということになる。⁹なお、実習とフィールドワークの関係については表1で整理した。

表1 実習の段階的目標とフィールドワークとの関係

実習	段階的目標	第1段階 体感・対話・問題の発見と調査	第2段階 自主計画・問題解決策の提案	第3段階 継続的な活動・地元への社会貢献
	実習形態	インターンシップ実習	プロジェクト実習	プロジェクト実習の発展
	インフォーマント	少ない	→	多い
	インフォーマントとの関係	希薄	密接	密接(協働)
	フィールドワークの位置づけ	事前学習、文書や統計の分析、見学、問題発見、人間関係が希薄な中でのインフォーマントへのインタビュー ＝広義のフィールドワーク		

I-3 白山麓実習の概要

白山麓実習は、石川県白山市の白山麓をフィールドとして活動する。

白山市は2005年に1市2町5村が合併し新設された都市で、このうちの5村(河内村・鳥越村・吉野谷村・尾口村・白峰村)の地域を白山麓(白山ろく)と呼称している。

2010年度と2011年度の白山麓実習は、旧河内村と旧吉野谷村にまたがる石川県白山ろくテーマパーク(都市公園・広域公園)をフィールドとし、2012年度は白山登山の他、旧白峰村でイベントを行った。また、2013年度は旧尾口村の石川県白山自然保護センター中宮展示館をイベントで使用した。宿泊は、瀬女高原コテージ村(旧尾口村・2010, 2011年度)、御前荘緑の村コテージ(旧白峰村・2012, 2014年度)、白山吉野工芸の里アート&クラフト館(旧吉野谷村・2013, 2014年度)を利

用している。

実習期間は、夏期休暇中の1週間以内で、2010年度は3泊4日、2011年度は4泊5日、2012年度から2014年度は5泊6日で実施している。全日程同施設に宿泊する場合(2010, 2011, 2013年度)もあるが、活動内容に応じて期間内に宿泊施設を移る場合(2012, 2014年度)もある。

実習生¹⁰は、2010年度7名、2011年度10名、2012年度11名、2013年度8名、2014年度9名で、実習期間全日程の引率は筆者が行う。実習期間終盤の週末には責任教員¹¹が現地入りする他、毎年複数の実習卒業生が加わる。

白山麓実習の具体的な目標については、年度を追うごとに変化しているためⅡからⅣの説明に委ねるが、これはⅠ-2で述べた第1段階から第3段階までの実習目標に準じる形になっている。活動内容や受け入れ先についても、実習目標とともに変化するためⅡからⅣで述べる。なお、概要につ

8 脚注2に同じ。合わせて久野教授の筆者への指導から。

9 脚注2に同じ。合わせて久野教授の筆者への指導から。

10 白山麓実習の報告においては「実習生」と記載、広く一般の学生を指す場合は「学生」と記載する。

11 2010年～2012年度は久野武教授。2013年度以降は佐山浩教授。

いては表2を参照されたい。

表2 白山麓実習概要表(2010年度～2014年度)

回数	年度	実習生	主な活動場所	主な内容	特記事項
1	2010	7名	白山ろくテーマパーク	①政策提案発表会 ・園芸療法イベント ・パークウェディング ・環境教育イベント 上記3つを都市公園(白山ろくテーマパーク)の活性化策として提案 ②都市公園の管理運営の補助業務	・白山麓実習スタート ・リサーチ・フェア ポスター部門奨励賞 (パークウェディング)
2	2011	10名	白山ろくテーマパーク	①園芸福祉イベント 『キッズすくすく園芸体験』の実施 ②政策提案発表会 ・白山麓活性化策の提案 ③都市公園の管理運営の補助業務	・リサーチ・コンソーシアム総会ポスターセッション参加 ・リサーチ・フェア 口頭部門優秀賞 (『キッズすくすく園芸体験』)
3	2012	11名	白山、旧白峰村集落(白山ろく民俗資料館含む)、白山ろくテーマパーク	①白山登山 ②地域教育イベント 『指導！白峰探検隊』の実施 ③政策提案発表会 ・白山麓実習3年間の振り返りと展望 ④都市公園の管理運営の補助業務	・リサーチ・コンソーシアム総会ポスターセッション参加 ・白山ろくテーマパーク指定管理者変更 ・3回生実習生を久野ゼミ外から募集 ・SPSアワード ベストコントリビューション ・久野武教授定年退職
4	2013	8名	白山ろくテーマパーク、白山自然保護センター中宮展示館、白山吉野工芸の里	①地域教育イベント 『あいラブ白山 我らジオパーク新聞社』の実施 ②政策提案発表会 ・白山ろくテーマパークにおけるオキナグサ保護活動への提案 ③都市公園の管理運営の補助業務	・リサーチ・コンソーシアム総会ポスターセッション参加 ・佐山浩教授着任 ・市民団体ツナグ白山麓発足 ・複数のゼミに所属する4回生がリーダーとなって実習実施 ・実習関連の連続論文、小島賞奨励賞
5	2014	9名	白山ろくテーマパーク、白山吉野工芸の里	①政策提案発表会in吉野工芸の里 ・『未来里地プロジェクト』の提案 ・座談会 ②政策提案発表会in白山ろくテーマパーク ・ジオソフト『まるごとと白山』の提案 ・白山ろくテーマパークにおけるオキナグサ保護活動への提案(前年から継続) ③都市公園の管理運営の補助業務	・リサーチ・コンソーシアム総会ポスターセッション参加 ・パークウェディングの実現 ・一般社団法人パークマネジメント協会 で筆者講演(白山麓実習の活動紹介) ・オープンキャンパスで実習生講演

Ⅱ. インターンシップ実習からプロジェクト実習へ(白山麓実習1～2年目)

Ⅱ-1 2010年度の目標と活動

2010年度の白山麓実習は白山ろくテーマパークを実習受け入れ先とし、8月22日～25日の3泊4日の日程で、同公園の指定管理者(造園業M社)指導のもと園内作業を行った。この中で第1段階の実習目標達成を目指すわけだが、具体的な内容は指定管理者による講義、園路清掃、渡渉池清掃、花摘みと栗作り(栗は来園者への土産)、白山ろくテーマパークの活性化策の発表である。

指定管理者の講義では、指定管理者となった経

緯や目的、企業における指定管理の位置づけ、公園行政と公園マネジメント、とりわけ造園業を本業とする指定管理者が公園集客を企図する難しさが語られた。

園路清掃、渡渉池清掃、花摘みと栗作りは、主に現地のシルバー人材センターから派遣されている公園スタッフとの共同作業である。ここでは公園マネジメントだけでなく、地域の現状や問題、歴史、文化が話題になった他、実習生からは日頃の関西での大学生活について話す様子が見られた。公園スタッフから見れば孫世代の若者との共同作業であり、公園スタッフ、実習生ともに満足度が高かった。以降5年間、この園内作業は欠かさず実施している(写真1)。

実習生は、指定管理者や公園スタッフと触れ合いながら都市公園マネジメントの一端を体験することで現場の問題点を学ぶことが出来た。すなわち白山ろくテーマパークの問題点は、都市公園としての利用効果向上のため、いかにして集客力を高めるかということであるが、インターンシップを通し、実習生はこの問題を自らの研究課題あるいは活動課題として捉えるようになっていった。

実習終盤には、白山ろくテーマパークを所管する石川県土木部公園緑地課と石川土木総合事務所の職員、指定管理者、地元企業、住民ら約20名の関係者を前に、公園集客力を高める3つの活性化策を政策提案発表会で提案した(写真2)。以下①～③が発表のタイトルである。

①『白山ろくテーマパークにおける園芸療法を活用した自主事業実施の意義』

②『パークウェディング導入の意義と期待される効果』

③『白山ろくテーマパークを核とした環境教育実施の効果』

①～③は、実習開始前の事前学習を通して実習生が考えてきたものだが、政策提案発表会に至る2日間の実習を通し、現地で追加、訂正された部分も多い。それぞれ20分程度で発表を行い、10分から15分程度の質疑応答の時間をもった。出席者からは質問や講評があったが、特に①②の発表が高い評価を得、いずれかを次年度の実習で試験実施してはどうかという意見が出た。

その後、実習生と現地関係者の懇親のためにパーベキューを行ったが、ここでも発表会の内容が話題となった。場所や雰囲気を変え、約3時間にわたって意見交換出来たことで、学生と現地関係者の間で活性化策の実現イメージの共有が図られたことは有意義であった。

2010年度の実習は、白山ろくテーマパークの活性化策を発表したという点では能動型の実習を

行ったようにも見える。しかし、3つの活性化策は白山麓を訪れたことのない学生が実習前に書籍やインターネットから得た情報で考えられたもので、2日間の実習を経て内容を高めたとはいえず、それは自主的な調査や活動で得た情報ではない。あくまでも園内作業中の会話の枠で収まる情報である。また、発表に対する質問や講評、パーベキュー時の意見交換も、実習生にとっては学習の色合いが強かったことから、やはり受動型のインターンシップ実習であったと評価すべきであろう。

では、白山麓実習はいつインターンシップ実習から能動型のプロジェクト実習へ成長していったか。それは2010年度の実習後から2011年度の実習を行うまでの期間である。

2010年度の実習を終え大学に戻った後、実習生は自主的にリサーチ・フェア¹²に参加することを決めた。口頭部門で①、ポスター部門で②を発表し、①②いずれかを来年度実現させるために学内の先生方から意見を聞きたいという。迎えたリサーチ・フェアでは、②がポスター部門奨励賞を受賞した。その後、当時3年生だった実習生は、白山ろくテーマパーク指定管理者にリサーチ・フェアの発表内容を報告し、公園所長の中村一彦氏らと意見交換を続けた。また、園芸療法の講師を訪ね実例を学んだ他、観光政策としてパークウェディングを取り入れている横浜市の担当課へのヒアリング調査を行うなど、精力的な活動を見せた。結果、2011年度の白山麓実習において、白山ろくテーマパーク指定管理者と実習生共催で①を試験実施することとなった。学生が提案した活性化策を実現させることが出来れば、インターンシップ実習で得た学びをフィールドに還元出来る。こうして白山麓実習はプロジェクト実習の形態を取っていくことになったのである。

なお、②のパークウェディングは実習時の政策

12 関西学院大学総合政策学部の学生を中心とした研究発表会。研究成果の発表、議論を通じてさらなる発展をはかる「知的交流の場」として開催されている。

提案発表会やリサーチ・フェアでは高評価を得たが、天候の問題や賛同してくれるブライダル業者の協力確約など、数か月の準備期間では実現困難と判断された。ただし、これにはついてはⅣ-3で後日談を報告する。



写真1 園内作業、公園スタッフの説明を聞く



写真2 政策提案発表会の様子

Ⅱ-2 2011年度の目標と活動

2011年度の実習は、前年同様受け入れ先を白山ろくテーマパークとし、同公園で園芸療法を試験実施することが目標となった。ただ、園芸療法は医療分野であるから素人が安易に取り組めるものでない。そこで園芸療法が園芸福祉の展開可能

野に含まれていることに着目した。¹³ 治療を目的とする園芸療法も、癒しを目的とする園芸福祉も、健康への好要因を園芸から生み出そうとする点は共通している。そこで園芸療法にかえて園芸福祉という名称を用いることとし、関係者との協議を経て、園芸福祉イベント『キッズすくすく園芸体験』を白山ろくテーマパークにて試験実施することが決定した。

同時に、『キッズすくすく園芸体験』は、白山ろくテーマパークの集客を目的に提案されたものである。集客の上、さらに都市公園の利用効果を高めることを企図すれば、地域活性化や教育利用といった社会貢献が求められ、イベント実施に合わせて考える必要がある。

そこで『キッズすくすく園芸体験』の目的を以下の通り定めた。

- ①白山ろくテーマパークの自主事業として実施し、集客に貢献すること
- ②植物や種、土と触れ合うことで、子ども(未就学児)の情操教育の場とすること
- ③第1次反抗期の子どもを持つ保護者に外出機会と癒しを提供すること
- ④子ども間、保護者間の親睦の場とすること

参加者は、定員を親子15組30名程度とし、白山ろくテーマパークから車で片道30分程度の地域(白山市・金沢市南部・小松市東部・野々市町¹⁴)に住む未就学児(目安の年齢は2歳)とその保護者を対象とした。開催日時は、白山麓実習が行われている2011年9月14日の午前、開催場所は白山ろくテーマパーク吉岡園地の特設花壇である。

こうして迎えた9月14日であったが、16組40名の参加となり、定員を若干超えての実施となった。参加者募集についてはⅡ-3で詳しく述べるが、子ども1人につき保護者1人という計算をしていたところ、祖父母も一緒に参加するケースが複数見られ、参加人数が多くなった。特設花壇は1

13 日本園芸福祉普及協会Webサイト <http://www.engeifukusi.com/> 2014.11.26閲覧

14 現在の野々市市

組ごとに使用する面積を決めていたため、参加人数の増加は問題にはならない。集客の面では嬉しい誤算であった。

受付では、ネームプレート、作業を説明する絵本、「動物さん・虫さん・お菓子さん」の3種類のシールを配布し、参加料500円を徴収した。参加料は、種・土・肥料・文具など諸経費分である。絵本は待ち時間に子どもを退屈させないため、またお土産になるものがあつた方が良いということで作製された。3種類のシールは作業効率のために参加者を班分けする目印になる。A・B・Cとはせず、可愛いシールと名称で子どもの気持ちを掴む狙いがあつた。いずれも実習生の発案である。

受付を先に終えた参加者には待ち時間が生じる。この間、実習生は積極的に子どもに話しかけた。普段は親子2人(『キッズすくすく園芸体験』参加者の場合は「母子2人」というケースのみ)で長時間過ごしていると思われ、実習生が子どもと遊ぶことで一時的でも保護者を解放しようという狙いがあつた。

参加者が集まってから、配布した絵本と同じものをスクリーンで上映(写真3)、作業方法などを説明した。その後、特設花壇に移動し、地元の農家のY氏指導のもとで野菜と花(コマツナ・ハツカダイコン・パンジー)、計3種の種まきを行った(写真4)。種を食べようとする子ども、土いじりを楽しむ子ども、虫に驚く子どもと様々であつたが、特設花壇では笑い声が絶えない。種まきを終えた後は、音楽を流して実習生が踊り、これに合わせて水やりをするといった演出も加えた(Ⅱ-3で紹介する児童館の先生からの助言を参考にした)。

イベント後には実習生と子どもの写真を撮る保護者が多く見られ、閉会時に満足度調査は行ったものの『キッズすくすく園芸体験』の成功は明らか

であつた。満足度調査では、「再度参加したいか」の質問に16組中15組が「参加したい」と答え、1組が自宅からの距離が遠いため「どちらともいえない」とした。「来園歴」の質問では、16組中6組が「はじめて来園」と回答しており、これは指定管理者に喜ばれた。「子どもが特に楽しんでいたプログラムは何か(複数回答可)」の質問は、種まきが13で最も多く、次いで大学生との交流が7、絵本が6となった。ここから『キッズすくすく園芸体験』が、子どもが自然に関心を持つきっかけ作り、情操教育の場として一定の機能を果たしたと考えて差し支えなからう。また、大学生との交流を楽しんだ子供が多かつた要因は、出来るだけ長い時間、大学生が子どもと直接接したためで、一時的でも保護者を育児から解放するという狙いは当たつたものと思われる。これに関しては、指定管理者の「園芸体験がここまで盛り上がるのは学生の力」とのコメントを引き出している。一方、保護者間の交流という面では、これに関する回答が少なかつたため、イベントが効果的に機能しなかつたと考えられる。以上、『キッズすくすく園芸体験』の報告である。

翌日に行われた政策提案発表会には、石川県土木部公園緑地課、石川土木総合事務所職員、地元住民ら、関係者約30名が出席した。2010年度は白山ろくテーマパークの活性化策を提案したが、2011年度は白山麓の活性化策を3回生が発表した。また、合わせて『キッズすくすく園芸体験』の実施報告を行った。講評では、石川県の職員より「行政は“錯誤”を恐れて“試行”が苦手であるから、『キッズすくすく園芸体験』のような挑戦は有難い」と謝意が伝えられた他、「白山手取川ジオパーク¹⁵の利活用を考えて欲しい」という要望があつた。『キッズすくすく園芸体験』が白山ろくテーマパークを所管する石川県の職員から評価されたことに加え、次の課題を提示されたことは白山麓実

15 白山手取川ジオパークは2011年9月5日に日本ジオパークに認定されており、これは同年の白山麓実習の直前のことである。

習に対する期待の表れであろう。こうして白山麓実習は、以降プロジェクト実習を基本形態としてフィールドワークに取り組むこととなった。



写真3 絵本の上映



写真4 『キッズすくすく園芸体験』種まき

Ⅱ-3 プロジェクト実習から学ぶ当事者意識

都市公園の子ども向け集客イベントを成功させるには、学校や幼稚園といった施設とタイアップし、生徒や園児、保護者を一括して集める方法がある。指定管理者、実習生とも、園芸福祉イベントの計画初期段階ではその方法を選択し、白山ろくテーマパークから車で片道20分程の場所にあるI校(計画当初は未就学児よりも数学年上の年齢を対象にしたプログラムを考えていた)に参加を呼

び掛けていた。指定管理者、実習生、筆者が数回に分かれてI校を訪問し、担当教員からは参加の快諾を得ていた。しかし、実施の2か月程前になり、I校からスクールバスが確保できなくなったという連絡を受けたのである。車でなければアクセスが困難な白山ろくテーマパークでの開催であるためI校誘致は断念せざるを得なかった。この時筆者は、正直に言って2011年度の実習中に園芸福祉イベントを実施するのは困難だと考え始めていた。

しかし、実習生は自らの活動で白山ろくテーマパークの集客に貢献したい、園芸福祉イベントの実施を通して地域に貢献したいという思いが強い。また、卒業論文を園芸福祉の効果をテーマに執筆する実習生もあり、今回のイベントは卒業論文研究における実験にもなっていた。指定管理者にしても、まずは試験実施してみないことには、園芸福祉イベントの効果が分からない。

こうした中で、実習生は園芸福祉イベントの対象年齢を再考した。ただ、高齢化が顕著な白山麓である。子どもの訪問が地域から望まれていることは、地元の高齢者との触れ合いの中で分かっている。そこで、指定管理者や実習生が指導しやすいと思われる幼児を対象にイベントを実施すると仮定し、2歳の子どもを持つ家庭を訪問、保護者の問題意識をヒアリングした。ここで発見したのが“Terrible2”(「魔の2歳児」「恐怖の2歳児」)という言葉である。これは一般に第1次反抗期の1歳半から3歳ごろの幼児を指す言葉で、インターネット上で検索すると、この世代の子どもを持つ保護者の悩み相談やアドバイスが数多くヒットする。それらの悩みを読んでいくと、「育児の仕方が分からない」といった内容も見られるが「相談相手がない」「1日中子どもと2人だけで自宅にいるのがストレス」といったものも見られた。ここから、実習生は「子どもと保護者、両者を対象とした園芸福祉イベントを実施すれば効果が高いのではな

いか」と推察したのである。

この推察を実習生が指定管理者に伝えたところ、対象年齢とプログラム変更には賛同を得た。これが『キッズすくすく園芸体験』の初案となったのである。しかし、集客方法が問題で、1歳半から3歳ごろとなると幼稚園や保育園に入る前の子どもが多く、施設誘致による一括集客は見込めない。また、保護者への外出機会や癒しの提供を目指すわけであるから、すでに幼稚園や保育園のコミュニティに加わっている保護者より、そこに至る前の保護者を対象とする方が園芸福祉イベントとしての効果が高い。

そこで、実習生と筆者は、白山市健康福祉部子育て支援課を訪ね、所管児童館で参加者募集したい旨を相談した。それにより子育て支援課から各児童館に事前連絡をして頂き、後日、実習生が4つの児童館を回りイベントの目的やプログラムを伝えることが出来た。児童館の先生からは、単なる園芸体験にせず歌や踊りを効果的に使うよう助言があるなど、営業としては手応えがあった。しかし、児童館では一般的に施設全体でイベントに参加することは少なく、イベントへの参加はチラシを見た保護者個々の判断に委ねられる。したがって、営業の成否は募集期間終盤まではほとんど不明であった。公園集客の難しさ、精神的な負担を、まさに当事者として学んだ時間であった。

『キッズすくすく園芸体験』の参加者募集に取り組んだ実習生は、前年に公園集客力を高める活性化策を提案している。しかし、その時点で公園集客の難しさを体感していたわけではない。つまり、提案の段階では指定管理者と同じ当事者意識を持っていなかったことになる。逆に、参加者募集に自ら取り組んだことで、実体験から公園集客の難しさを知ることになった。指定管理者がなぜ公園集客を問題としていたのか、理解することが出来たはずである。

Ⅱ-4 考察

2010年度に提案した白山ろくテーマパークの活性化策が2011年度の『キッズすくすく園芸体験』の試験実施につながったことは、インターンシップ実習からプロジェクト実習への成長の証といえる。

この成長要因には、まずⅡ-3で述べた学生の当事者意識の高まりがあげられる。

実習生は、当事者意識を高めながら『キッズすくすく園芸体験』の準備に臨んだ。これにより指定管理者はじめ関係機関との意思疎通が図られ、相互の協力関係を構築することが出来た。それが『キッズすくすく園芸体験』を成功へと導き、白山麓実習をプロジェクト実習へと押し上げる要因になったことは間違いない。フィールドワークがインフォーマントとの密接な人間関係によって情報を得ることを目的の1つとすることはⅠ-1で述べたが、当事者意識なくしては、現地の関係者からの信頼や協力が得られず、密接な人間関係を構築することも難しい。つまり実習生の当事者意識は、問題解決策の実行を主とするプロジェクト実習を行うためにも、効果的なフィールドワークを行うためにも欠かせない要因だといえる。

次にリサーチ・フェアの存在があげられる。

『キッズすくすく園芸体験』を試験実施した実習生は、リサーチ・フェアを利用して自らの計画を洗練させた。また、リサーチ・フェアに参加することで、夏季休暇を過ぎても実習地との関わりが保たれ活動意欲も維持された。さらに結果論ではあるが、2010年度のリサーチ・フェアでは、パークウェディングをテーマにしたポスター発表で奨励賞を受賞し、『キッズすくすく園芸体験』の原案となった園芸療法をテーマとした口頭発表では受賞を逃している。これが『キッズすくすく園芸体験』を主導していた実習生の競争心を刺激したことは想像に難くない。このように実習生の意欲を

維持する上でリサーチ・フェアが有効な役割を果たしたと思われる。なお、2011年度のリサーチ・フェアでは『キッズすくすく園芸体験』の実施報告が口頭部門で優秀賞を獲得し、リベンジを果たす格好となった。

2011年度の『キッズすくすく園芸体験』をきっかけとして、以降、白山麓実習はプロジェクト実習としてフィールド、関係機関を拡大しながら活動していくこととなる。

Ⅲ. プロジェクト実習の発展とイベントの限界 (白山麓実習3～4年目)

Ⅲ-1 2012年度の目標と活動

2011年度の政策提案発表会で学生が白山麓地域の活性化策を発表し、これに対し石川県の職員より白山手取川ジオパークの利活用について考えて欲しいという要望が出されたことはⅡ-2で述べた。そこで2012年度は、過去2年間活動してきた白山ろくテーマパーク¹⁶では園内作業のみ行うこととし、主に白山手取川ジオパークの利活用に取り組むことを目標とした。具体的には白山手取川ジオパークを活用した地域教育イベントの実施である。

また、2012年度は白山登山に挑戦した。1泊2日の行程で、参加した実習生全員が登頂、無事下山した(写真5)。白山は、白山手取川ジオパークの核であり、白山の名を冠する白山麓実習にとって、登山は2010年度からの課題であった。過去2年間登山を断念していたのは日程面とリスク面からであるが、2012年度の実習生は白山手取川ジオパークの利活用を考えるために白山登山を決行する強い意志があった。白山登山は実習期間の最初

の2日間で、以降、白山ろくテーマパークでの園内作業、地域教育イベント『始動！白峰探検隊～ジオパークには宝物がいっぱい～』(以下『白峰探検隊』)を行った。

2012年度の目標は、白山手取川ジオパークの利活用に取り組むこと、すなわち地域教育イベント『白峰探検隊』の実施となったわけだが、ここで白山手取川ジオパークの特徴と、地域教育の趣旨について述べておく。

白山手取川ジオパークは、2011年9月に日本ジオパークに認定され、「山－川－海そして雪、いのちを育む水の旅」をテーマとしている。地質遺産の保護、地質遺産を用いた教育・科学の普及、地質遺産を用いた観光・ジオツーリズムの推進がジオパーク本来の目的であるが、白山手取川ジオパークはこれに加えて白山市統合のシンボルという側面がある。¹⁷

白山市が2005年に1市2町5村が合併し新設された都市であることはすでに述べた。しかし、白山市では庁舎や公共施設、特に旧村営スキー場の統廃合を巡って関係する市民間で様々な対立があったし、平野部と山間部に住む市民の問題意識の共有も難しい。歴史的にも文化的にも異なる8つの自治体が合併したのだから、市民の共有意識を育むことは容易ではない。市民の意識が共有されていなければ、政策の立案、決定、実施のプロセスには遅滞が生じやすい。結果、「市町村合併そのものが間違いであった」という声が市民の中で強まれば悪循環である。

白山市は、市全域がそのままジオパークに指定されており、手取川が山間部から平野部を抜け、旧美川町の河口まで流れている。白山に降り積もった雪が溶け、手取川となって、山を下り、谷を削り、平野に至って豊かな扇状地を形成する。

16 2012年度より白山ろくテーマパークの指定管理者がM社からK社に変更された。白山麓実習の受け入れ可否が心配されたが、地元住民からK社に実習受け入れの要請があったこと。これにより新たに指定管理者となったK社また公園スタッフから2012年度の実習も温かく迎えて頂くことが出来た。なお、公園所長の中村氏はK社に再雇用され継続して白山麓実習に協力して下さることとなった。

17 白山手取川ジオパークWebサイト <http://hakusan-geo.main.jp/> 2014.12.24閲覧

日本海に注いだ手取川の水は、冬に雪雲になって白山に雪を降らす。こうした水の循環(=旅)から恩恵を受け、命を育み生活を営んでいるのが白山市民であり、これは平野部も山間部も同じである。ゆえに白山手取川ジオパークを白山市統合のシンボルとし、これを活用して市民の共有意識を醸成していくという構想が生まれたのである。

地域教育については、京都市教育委員会地域教育専門主事室が著書『京都発 地域教育のすすめ』の中で、地域教育とは「子どもが地域を再認識することを出発点とし、地域を愛し、地域の一員としてよりよく行動することができる子どもを育成する教育であるとともに、教育活動を地域の人々とともに進めることにより、『地域の子は地域で育てる』という認識を地域に培う営みである」と述べている。¹⁸ また、教育基本法第13条では「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする」と規定されている他、文部科学省は「地域の教育力」を地域内の子ども、保護者、一般住民が交流などを行うことにより、地域全体で子どもを育て、守る、雰囲気や仕組みを生み出すこととしている。¹⁹

『白峰探検隊』は、白山手取川ジオパークの白山市統合のシンボルとしての役割を追求し、地域教育イベントとしての効果を得ること目的に行った。参加した小学生が身近なジオを体感することで、白山手取川ジオパークや白山市への愛着を持ち、ひいては「ふるさと＝白山市」という共有意識を抱くことに繋げたい。同時に、地域の大人との触れ合いの中で学びを得る機会を創出するということである。

プログラムは、旧白峰村集落でのクイズラリー

と石川県白山ろく民俗資料館でのポスター作製の前後半で行う。

午前9時、会場となった白山ろく民俗資料館にて準備を開始した。会場は石川県指定有形文化財であり細心の注意を払って使用しなければならない。これにはポスターをちぎり絵で作製、また床にブルーシートを敷いて対応した。他方、こうした貴重な建物を使用させて頂ける理由には、前年の『キッズすくすく園芸体験』の実績があるように思われた。実習継続の効果や現地との信頼関係は、こうした部分に表れることがある。

『白峰探検隊』開始前、まずは白山市観光推進部²⁰ジオパーク推進室(以下ジオパーク推進室)がチャーターしたバスが到着した。これには白山市内の平野部や吉野谷周辺の小学生、ジオパーク推進室と白山市教育委員会白山ろく分室の職員が乗っていた。その後は保護者と一緒に参加する小学生が順次マイカーで集まり定刻には参加者が揃った。

午前10時、『白峰探検隊』はオリエンテーションから始まった。実習生によるプログラムの説明の後、ジオパーク推進室主査の日比野剛氏による白山手取川ジオパークの講義である(写真6)。ここでの講義内容はクイズラリーや午後のポスター作製の基礎情報となる。なお、日比野氏には『白峰探検隊』の実施時だけでなく実習下見時から実習生を指導頂いた(写真7)。

その後、小学生は5チームに分かれてクイズラリーに出発、地図に従ってチェックポイントに向かう。各チームには実習生が引率者として加わっているが、出来る限り小学生が自力でクイズラリーを進められるよう見守る。すると、クイズの答えをすれ違う地元の高齢者に尋ねる小学生も見

18 京都市教育委員会地域教育専門主事室編『京都発 地域教育のすすめ』ミネルヴァ書房 2005 20頁

19 文部科学省Webサイト http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/003/siryou/06032317/002/003.htm 2014.12.2閲覧

20 現在は観光文化部に名称変更されている。

られた。なお、チェックポイント(山岸家²¹・林西寺²²・十一面観世音菩薩立像²³・雪だるまカフェ²⁴・なめこ姉さん²⁵・大梯子²⁶など)は白峰の自然、歴史、文化を感じられるスポットとなっている。クイズの回答から特定のアルファベットが分かる仕組みになっており、このアルファベットを正しく並べると「BOUKEN=冒険」となる。これを、解答用紙中の虫食いに当てはめると「大人になってもふるさとは“冒険”がいっぱい」となり、この一文が宝物という趣向である。

クイズラリーに続いてポスター作製である。午前中の講義とクイズラリーで勉強した内容をアウトプットする目的で、各チームが割り当てられたポスターのピースを作製する。合計9枚のピースの内、事前に実習生が4枚を作っており、残りの5枚を小学生が作製する。9枚をつなぎ合わせると、白山手取川ジオパークの「山と雪のエリア」(白峰が中心)が表現される。各チームに配られた用紙には事前に下絵が描かれているから、小学生はこれに従って色紙をちぎり、貼っていく。後日、完成したポスターは白山市内の複数の公共施設で出張展示された(写真8)。

閉会式が終わり、帰路につく小学生にはフォトメッセージカードが配られた。カードを読む小学生、実習生と一緒に記念写真を撮影する小学生の様子が見られた。

『白峰探検隊』について、ポスター作製終盤の時間に参加の小学生および保護者に対して満足度調査を実施した。主だった項目の結果は以下の通りである。

【回答者全15名(小学生9名、保護者6名)】

- 白峰へ初来訪(5/9)
*小学生のみ回答
- ジオパークについて知らなかった(5/9)
*小学生のみ回答
- 白峰についてよく学べた(9/9)
*小学生のみ回答
- また白峰に来たい(9/9)
*小学生のみ回答
- 地域教育は達成できた(6/6)
*保護者のみ回答

「よく学べた」についてはテストしないと判断出来ず、「また白峰に来たい」というものも、実際に再訪があってから評価すべきであろう。しかし、平野部の5名の小学生が白峰初来訪であった。平野部から白峰は車で1時間の道のりで、訪れる機会が少ないものと思われる。その意味ではイベントを催したことは意義があった。また、ジオパークについて知らなかった小学生も5名と複数で、『白峰探検隊』への参加が知る機会となったことは成果といえる。

ただ、白山市民として「ふるさと=白山市」という共有意識を参加した小学生に育むことが出来たかといえ、これは長期的な視点からの評価が必要である。また、地域教育としての成果も、今後『白峰探検隊』に参加した小学生の「地域の一人としてよりよく行動する」姿が見られなければならないし、『白峰探検隊』同様の取り組みを地域が主体となって継続して行うことが求められる。とはいえ、白山手取川ジオパークを活用して様々なイ

21 白峰地区は国指定重要伝統建造物群保存地区に指定されており、山岸家は黄土色の大壁と縦長窓を持つ代表的な家屋。(白山市観光連盟Webサイト「うらら白山人」<http://urara-hakusanbito.com> 2014.12.5閲覧)

22 白山信仰を伝える十一面観世音菩薩立像など7体の仏像と泰澄大使像を安置する古刹。(白山市観光連盟Webサイト「うらら白山人」<http://urara-hakusanbito.com> 2014.12.5閲覧)

23 国指定重要文化財。白山本地仏。明治時代の神仏分離令により白山山頂から下山、現在は林西寺にまつられている。(白山市観光連盟Webサイト「うらら白山人」<http://urara-hakusanbito.com> 2014.12.5閲覧)

24 明治初期に建てられた木造家屋を改良したカフェ。(白山市観光連盟Webサイト「うらら白山人」<http://urara-hakusanbito.com> 2014.12.5閲覧)

25 白峰地区の特産であるなめこをPRするため、実習生がなめこの帽子をかぶって子どもたちを待った。

26 豪雪地帯の白峰では、雪下ろしのために常に大きな梯子が家屋の外壁に取り付けられている。(いしかわ観光特使事務局Webサイト<http://hot-ishikawa.jp> 2014.12.5閲覧)

イベントを重ねられればジオパークの発信力が高まる。例えば、『白峰探検隊』は、白山市広報の表紙を飾った他、地元紙、地元テレビ局で報道されており、白山市統合のシンボルであるジオパークをPRしたという点では評価すべきであろう(記事1、記事2)。

『白峰探検隊』終了後、御前荘緑の村コテージにて、ジオパーク推進室また白山市白峰支所の職員、地元のボランティア、実習卒業生、教員、実習生と総勢30名ほどで懇親会を行った。その際、ジオパーク推進室の山口隆室長より「(白山麓実習を)まず10年は続けて欲しい」というコメントがあった。今回のイベントを、来年、再来年の実習に活かしていくことでより大きな成果が望めるし、継続しなければ理解出来ない地域の現状や問題もあるように思うとのことだった。確かに、『白峰探検隊』のような市民の意識に働きかけるイベント、あるいは教育イベントは、白山麓実習を長期継続させ、未来の学生がその成果を検証すべきものなのかもしれない。また、白山市の職員からは「運営者が学生だから楽しんでもらえた。自治体職員だけで同じことをやってもここまで楽しんでもらえない」というコメントがあった。前年の『キッズすくすく園芸体験』でも同様のコメントがあったが、これにより当時3回生だった実習生は、2年間の成功モデルを継承し自らも学生の持ち味を発揮して活動する決意を固めた。

なお、『白峰探検隊』を中心とした2012年度の白山麓実習は、関西学院大学 総合政策学部のSPS アワード ベスト コントリビューション²⁷を獲得した。



写真5 白山登頂



写真6 『白峰探検隊』クイズラリー前の日比野氏による講義



写真7 実習下見、白山市化石調査センターにて日比野氏の説明を聞く

27 総合政策学部内で毎年10名以内が選ばれる。課外活動における顕著な成績、功績を評価する賞。

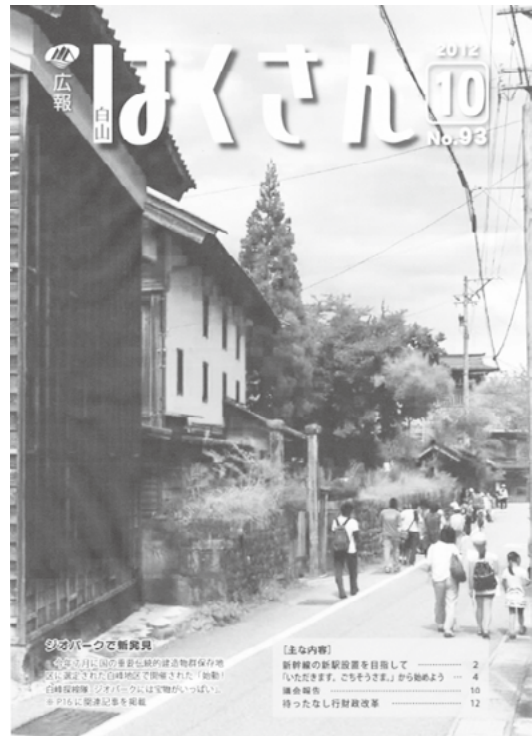


写真8 『白峰探検隊』で作製したポスター

記事1 『白峰探検隊』の記事、
写真はクイズラリーの様子
(2012年9月9日北陸中日新聞)

Ⅲ-2 2013年度の目標と活動

Ⅲ-1で述べた通り、2013年度の白山麓実習は2012年度のモデルを継承する内容となった。異なる点は、舞台を再び白山ろくテーマパークに戻したこと、新たに白山吉野工芸の里の支援を受けたことである。また責任教員の変更があった。²⁸こ

記事2 白山市広報の表紙を飾る
(2012年10月発行白山市広報)

れに伴い、実習の中心は久野ゼミにも佐山ゼミにも属さない3名の4回生となった(今井一郎ゼミ、細見和志ゼミ、ケビン ヘファナンゼミ)。

ゼミは指導教員が定年を迎える1年前から3回生の募集を停止するため(指導教員の最終年度は4回生だけでゼミを行う)、白山麓実習は2012年度中に学部横断で3回生を募集しなければならなかった。こうして集まった上記の3名が2013年度の実習のリーダーを務め、ここに2013年度にスタートした佐山ゼミ(3回生のみで構成)の3回生5名が加わる形となったのである。

2012年度は、白山登山を行い、白峰を拠点に活動したため、白山ろくテーマパークでの園内作業や指定管理者の都市公園マネジメントに触れ合う機会が少なかった。『白峰探検隊』を実習生中心で成功させたことは評価出来るが、地元の高齢者と

28 2012年度をもって久野武教授が定年退職され、新たに着任された佐山浩教授が白山麓実習の責任教員となった。

接し地域について語らう、指定管理者から指定管理者制度や都市公園マネジメントに関する講義を受けるといったことがなかった。そのため、白山麓地域に関する知識や、白山麓実習と深く関わる制度やシステムについて理解が不足していた実習生も見られた。

そこで、2013年度はプロジェクトに重心置きながらも、インターンシップの要素を多く取り込む実習計画を立てた。インターンシップ実習が体感、学習、調査といったインプットであり、プロジェクト実習は提案、実行、地域貢献といったアウトプットであるから、外見的な成果やメディアの注目は後者が大きい。ただ、目先の成果に目を奪われると、土台となる情報が不足し提案の実現可能性も低下する。例えば、2011年度は『キッズすくすく園芸体験』実施という目標を達成したわけだが、これには2010年度のインターンシップ実習で得た情報や知識が土台となっている。こうした情報や知識は、先輩から後輩へと学生間である程度引き継ぐことが出来るが、それも学年を経て薄れていく。2013年度の白山麓実習に参加した4回生は、2011年度以前の実習を経験しておらず、ゼミも別々であったため先輩から情報や知識を引き継ぐことが困難であった。したがって、この時点で再度インターンシップの要素を組み込むことが求められたのである。

まず、インターンシップ実習として白山ろくテーマパーク内でのオキナグサ保護に関わることとした。次に、プロジェクト実習として2012年同様に白山手取川ジオパークの利活用を目指し、第2弾の地域教育イベントというべき『あいラブ白山・我らジオパーク新聞社』(以下『ジオパーク新聞社』)を実施することとした。

Ⅲ-2-1 白山ろくテーマパークにおけるオキナグサ保護活動

白山ろくテーマパーク内でのオキナグサ保護

は、2013年の春から石川県白山自然保護センターと白山ろくテーマパーク指定管理者が取り組んでいる事業である。オキナグサは環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に、石川県では県指定希少野生動植物種に指定されている。石川県のオキナグサは白山ろくテーマパークに近接する手取峡谷の岩場に自生しているものの、2013年度時点においては163株が確認されるに留まっている。それにも関わらず、岩場に自生するオキナグサが珍しく、盗掘事件が度々発生している状況にあった。石川県は「ふるさと石川の環境を守り育てる条例」で罰則規定を設けているものの、パトロールの人員確保などが難しく、対応に苦慮していた。その中で、白山自然保護センターと白山ろくテーマパーク指定管理者が、白山ろくテーマパーク内の花壇を使用して自生地で採取した種からオキナグサを育てる試みを開始したのである。

実習生は、園内の花壇に移植されたオキナグサの育成また活用の方法を考え、これを提案することになったわけだが、白山自然保護センターの野上達也氏と議論を交わす中で、「自生地保護を住民参加で行うことは出来ないのか」という疑問が生じた。これに対し野上氏からは、「参加住民からの自生地情報漏えいの危惧」を理由として住民参加型のパトロールは困難との見解が示された。野上氏の言う通り、昨今のインターネット事情を鑑みれば、情報漏えいには細心の注意を払う必要がある。一方、住民はオキナグサについてどのような意見を持っているのか、学生は現地の山野草愛好家団体の代表、吉野地区区長、染色作家といった住民の中でもオキナグサ関連の知識を有する人物、また地元住民でもある白山ろくテーマパークのスタッフにヒアリング調査を行った。すると、住民の多くがオキナグサに関心があり、一部住民からは「盗掘されているのを知っているから何かしたいが県が情報を公開してくれない」といった不満の声も聞かれた。住民の要望があった

としても安易な自生地情報の公開にはリスクが伴う。しかし、地域の貴重な植物であるオキナグサを守りたいという住民の意欲も無視出来ない。

そこで、実習生は自生地保護に住民が関わる前のステップとして、行政側と住民側が相互に意見交換し、信頼関係を構築する必要があるとし、これを実現させるべく『オキナグサ・マイスター制度』を提案したのである(記事3)。

この制度は、野上氏ら白山自然保護センターの職員が講師になり、住民ボランティアを指導、白山ろくテーマパーク内のオキナグサの管理育成を行う。その過程で、野上氏らがオキナグサの生態、県の盗掘防止策や情報管理への考え方など、関連する知識をボランティアに伝えていく。協働作業と知識習得を通して両者に一定の信頼関係が構築されれば、それをより高度な住民参加の土壌とし、最終的には自生地保護に住民が参加するプログラムを構築する。つまり、特に知識習得が認められたボランティアには、白山自然保護センターが『オキナグサ・マイスター』の称号を授与し、野上氏ら白山自然保護センター職員のパトロールを補完するなど、地元警察との連携を前提に積極的な保護活動を依頼する、というものである。

実習生は、この『オキナグサ・マイスター制度』を提案するにあたり、白山自然保護センター、指定管理者、住民、また白山市が推進する白山手取川ジオパークにおいて、オキナグサ保護がどのような位置づけにあるのか、様々な視点や考え方を学んだ。その結果、『オキナグサ・マイスター制度』は、内容に大きな変更を加えられることなく、翌年2014年4月に実際に導入されることになる。これは「インフォーマントとの密接な人間関係」を前提とし、「密着取材」的な聞き取りを行った成果であり、効果的なインターンシップ実習が行われたものと評価出来る。



記事3 『オキナグサ・マイスター制度』発表の記事(右側、2013年8月28日北陸建設工業新聞)

Ⅲ-2-2 2回目の白山手取川ジオパークを活用した地域教育イベント

プロジェクト実習としては『ジオパーク新聞社』を実施した。地域教育イベントで、白山手取川ジオパークの利活用という目標は前年の『白峰探検隊』と同じだが、『白峰探検隊』が単独イベントであったのに対し、『ジオパーク新聞社』は白山手取川ジオパーク推進協議会が主催する『子どもジオ博士』認定カリキュラム全3日間の最終日に行う。また、『白峰探検隊』『子どもジオ博士』とも対象は白山市内の小学生であるが、『白峰探検隊』では「ジオパークのことを初めて知った」という小学生が複数いた。一方、『ジオパーク新聞社』は、イベント実施までに『子どもジオ博士』のカリキュラムを2日目まで終えており、ジオパークに関する知識が豊富な小学生が対象となる。そこで小学生には『子どもジオ博士』のカリキュラムで学んだ内容を保護者や友達に向けて伝える壁新聞を作製してもらうこととした。これにより『白峰探検隊』では実習生が小学生を教える立場であったが、『ジオパーク新聞社』は実習生が小学生を手伝う形になった。

『ジオパーク新聞社』当日、午前9時にジオパーク推進室チャーターのバスが白山ろくテーマパークに到着、実習生が乗り込んで、まずは白山自然保護センター中宮展示館を訪問した(写真9)。展示館内での学習の後は、手取峡谷の濁澄橋や吉野

工芸の里の御仏供杉を見学し白山ろくテーマパークに戻る。昼食休憩を挟んで壁新聞作製である。

グループに分かれ作製がスタートした。すでに小学生と実習生は仲が良くなっており、実習生は上手くグループを誘導しながら作業を進めていく。あいにく天気が悪く、午前中の訪問先では予定されていた川遊びがなくなるアクシデントがあった。一部の小学生からは不貞腐れた様子も見られたが、壁新聞作製に入ってから楽しんでいるように思われた。

壁新聞完成後、発表を行った。ジオパークへの理解や、自分たちがジオパーク情報の発信のために取り組める活動に関して、小学生ならではのアイデアが書かれていた。同じカリキュラムで学習してきた小学生ではあるが、グループに分かれて壁新聞を作製すると、どれも異なった内容になる。壁新聞は前年のポスター同様、白山市内の公共施設で展示されるが、市民の関心を惹けそうである。イベント閉会の際には、山口室長から小学生に『子どもジオ博士認定証』が授与された。また、実習生からはオリジナルメッセージカードを手渡した(写真10)。

小学生には満足度調査を実施したが、全ての質問で好評価を得た。小学生が楽しんでいる様子を見ていれば予想できる結果だが、Ⅲ-1でも述べたように、地域教育イベント、共有意識の醸成は長期的な視点で評価する必要がある。ただ、後日、小学生(女子)から感謝の手紙が実習生宛に届いた。今回のイベントを通して、ジオパークや白山市に関心を持ったこと、そして将来は関西学院大学 総合政策学部への入学を目指したいという内容が書かれていた。イベントの満足度という点では、満足度調査と手紙を合わせて好評を得たといつて良いだろう。また、前年に続いて参加者の満足度の高いイベントを実施したことで、白山手取川ジオパークの利活用には貢献出来たものと思われる(記事4)。

日比野氏からは『ジオパーク新聞社』について、「普段はインプットの活動(講義や見学)は行っているが、壁新聞でアウトプットの活動が出来て良かった」との講評があった。また「小学生にとっては“年齢的に身近な大人”になれる大学生」というコメントもあり、大学生がイベントを実施する意義を再確認することとなった。



写真9 白山自然保護センター中宮展示館にて、小学生と実習生



写真10 『子どもジオ博士認定証』と『メッセージカード』を渡し終えた後の記念撮影



記事4 『ジオパーク新聞社』の記事
(2013年8月24日北陸中日新聞)

Ⅲ-3 産官民学連携によるフィールドの拡大

白山麓実習3、4年目(2012、2013年度)は、白山ろくテーマパークを拠点として活動していた1、2年目(2010、2011年度)と比べてフィールドが拡大した。2012年度は旧白峰村で『白峰探検隊』を実施し、2013年度は旧尾口村の中宮展示館を小学生とともに訪れた。また、こうしたフィールドの拡大を象徴するように白山市広報や地元紙、地元テレビ局で白山麓実習の活動が報道されるようになった。

フィールドを拡大して活動するためには関係機関との連携が必要になる。白山手取川ジオパークの関係であれば白山市のジオパーク推進室やジオパーク推進協議会、オキナグサの関係であれば白山自然保護センターや住民の代表者との連携が欠かせない。白山ろくテーマパークの指定管理者や、所管の石川県土木部公園緑地課、石川土木総合事務所との関係強化は言うまでもない。また、フィールドの拡大に伴い、関西学院大学 総合政策研究科 リサーチ・コンソーシアム²⁹会員企業の子会社からの実習支援も大きくなった。さらに、吉野工芸の里のように白山麓実習を応援して下さる厚意にも応えていきたい。なお、白山麓実習を核とした産官民学連携については図1を参照されたい。

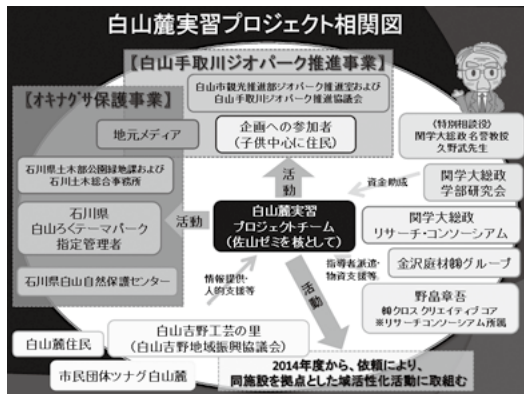
しかし、何かしらの実行、実現のためには、実習生が関係機関に赴いて目的や内容、計画を説明する必要がある。同じ説明をしても、ある機関では賛同され、他の機関では否定されるケースも度々である。その場合、両者の考え方の違いを把握して一致点を探り、協力を引き出せるよう計画を練り直さねばならない。これは産官民学連携の難しさであるが、同時に実習生にとっては大きな学びになろう。異なる立場、異なる考えの個人や団体と議論を重ねながら1つの方向を導き出していくという作業は、実社会的かつ総合的な視点を

養う上で重要な経験になるはずである。

他方、フィールドワークが「自由度の高い実践」と説明できることはI-1で述べたが、この実践の中には実行(=実験)が含まれるべきであろう。実習生の提案を実行に移し、その結果を検証するということである。もちろんヒアリングやアンケート調査、統計や資料の分析が不十分な提案は、問題解決に寄与しないだけでなく実現可能性が乏しい。しかし、現地現場では問題解決が最優先事項である。「分かること」より「(実効を得るために)動くこと」が求められている。また、公園集客や産官民学連携の難しさは「動かなければ分からないこと」でもあった。白山麓実習卒業生(真摯に取り組んだ実習生という意味ではあるが…)は、“動かなくても論じることは出来るが、動かなければ理解出来ないことが多い”ことを経験的に知ったはずである。したがって、実習生には、現地現場の問題を調査し、問題解決策を提案、提案の実行へと進んだ後、その結果に十分な検証を加えてもらいたい。精密な調査や理論から導き出した提案であっても、それが実社会でどのような成果を上げるのか、実験がなければ証明出来ない。その意味で、提案からの実行は机上の空論から抜け出す重要な研究活動の1つといえる。

加えて、産官民学連携に関して付記しておかなければならないのは、県外学生の利点である。1市2町5村の合併によって生まれた白山市、また合併前5つの村に分かれていた白山麓は、市民住民の思惑が一致しないことが多い。しかし、しがらみの少ない県外学生であれば中立な立場に身を置ける。ゆえに現地の問題解決策を提案する場面では、複数の関係機関が一旦は話を聞いてくれるし、実行の場面でも協力を得られやすい。これは県外学生が現地現場に加わることで、新しい人間関係や協力関係を築ききっかけとなることを示している。

29 関西学院大学 総合政策研究科が主催する産官民学研究協力機構。

図1 白山麓実習 関係機関関係図³⁰

Ⅲ-4 考察

インターンシップ実習からプロジェクト実習と実践してきた中で、現地では「白山麓実習は大学生による地域貢献活動」という認知が高まった。『キッズすくすく園芸体験』『白峰探検隊』『ジオパーク新聞社』またオキナグサ保護に関する提案は、地域貢献活動であるからこそ関係機関からの賛同と協力を得られたのである。

白山麓実習への歓迎ムードも年々高まってきた。2013年度は全日程で吉野工芸の里を宿泊施設として利用した。過去の実習でも指導頂いた白山吉野地域振興協議会会長の西出一久氏らの手配によるもので、実習期間中では食べ切れないほどの地元野菜の差し入れ付きである。そればかりか吉野工芸の里の染色作家である島田鯛子氏が地元食材を使った料理教室を開催してくれる歓迎ぶりであった。また、白山ろくテーマパーク内で園内作業を行う際には、地元の高齢者が数多く集まって下さる。「(非番でも)大学生との作業を楽しみにしていたから来た」という公園スタッフも少なくない。2011年のリサーチ・コンソーシアム総会ポスターセッションでは、ある先生から「実習を継続させ、地元の人たちにとって恒例の“お祭り”に

なるようにしなければならない」との助言があったが、実習開始から4年目を迎え、白山麓実習は地元の恒例行事になりつつあった。

しかし、こうした期待や歓迎に応えることは容易ではない。Ⅲ-2で述べたように先輩から後輩へ情報や知識を引き継ぐことの難しさも実感している。

ここでヒントになったのは、Ⅰ-2で述べた「自ら組織化していくことで、継続的なフィールドワークの体系化を図る」ということであった。新たな組織を立ち上げ、白山麓実習の継続を助けるとともに活動を補完することが出来れば、現地の期待に応えやすくなる。こうして『市民団体ツナグ白山麓』が誕生した。いわば白山麓実習のOB・OG会であるが、地元からも複数名の参加を頂いている。

また、2011年度以降、都市公園の活性化やジオパークの利活用を目指して『キッズすくすく園芸体験』『白峰探検隊』『ジオパーク新聞社』を実行してきたが、これらはいずれもイベントである。白山麓実習が地域貢献活動として認知された以上、単発のイベントで実習成果を追求するのではなく、実習成果が地域に根付くような活動を展開すべきであろう。その意味ではイベントの限界を自覚し、この実習形態からの卒業を考えなければならない。そういうことで翌2014年度の白山麓実習は、実習成果を地域に定着させるための新たな活動を模索することとなった。

Ⅳ. 実習成果を定着させるために

(白山麓実習5年目)

Ⅳ-1 2014年度の目標と活動

2014年度は、白山麓実習を明確に地域貢献活動型フィールドワークと位置づけ、その成果を定着

させるため、3つの具体的な目標を掲げて活動した。3つの目標は次の通りである。

第1に、市民参加プログラムの導入、また継続運用である。前年提案した『オキナグサ・マイスター制度』を、白山ろくテーマパークにおける市民参加プログラムとして実際に導入し、オキナグサ保護への市民参加活動を定着させる。

第2に、実習生が地元食材の新たな活用を考え、商品化を目指すもの。詳細についてはⅣ-1-2で述べるが、前年の実習時に地元住民から「白山麓を食でPRしてほしい」との依頼があった。そこで実習生が考案したのがソフトクリーム『まるっこと白山』である。『まるっこと白山』を商品化することで、実習成果としてモノを定着させる。

第3に、白山麓実習の長期計画(カリキュラム)を発表することである。5年目を迎えた白山麓実習は、現地での認知度こそ高まっているものの、活動内容が年ごとに異なっていた。これは自由度の面で利点があるが、翌年の計画が見えづらく、現地の受け入れに負担をかける面もある。そこで白山麓実習の長期計画を発表し、次年度以降の基本的なカリキュラムとする。これにより現地と実習生(筆者はじめ指導者)との間で白山麓実習の将来像を共有し、実習そのものの継続、定着を図っていく。これは白山麓実習への参加を考える学生にとっても意味がある。

Ⅳ-1-1 市民参加プログラムの導入と運用

ー白山ろくテーマパークにおけるオキナグサ保護活動ー

前年提案した『オキナグサ・マイスター制度』(市民参加プログラム)は、2014年4月から実際に白山ろくテーマパークに導入、運用が開始された(写真11)。したがって、これで2014年度の白山麓実習の3つの目標の内1つが4月時点で達成されたことになる。しかし、正確には『オキナグサ・マイスター制度』という名称が用いられているわけ

ではなく、1つの市民参加プログラムとして運用されることとなった。特に名称を与えていない理由としては、試験実施の意味合いが強いことがある。つまり、まずは1年間試験実施(5月～10月まで計6日間の予定)してみ、活動が盛況であれば継続発展させていくということである。逆に、盛り上がりや欠くようであれば1年間で活動が打ち切られる可能性もある。

そこで、2014年9月の白山麓実習本番までに、実習生が白山ろくテーマパーク内での保護活動に複数回参加し、問題点を抽出、その解決策を提案することとした。これをもって導入された市民参加プログラムの継続運用を目指す。

実習本番までに予定されていた計4日間の活動の内、実習生は3日間に参加し、白山自然保護センターの野上氏、白山ろくテーマパーク公園所長の中村氏、10名のボランティアと意見交換を行い、以下①②③の問題点を発見した。これらは市民参加プログラムを継続、発展させる上で解決が急がれると判断されたものである。

①活動の楽しさ向上

②園内のオキナグサの利活用

③関係者間での活動目的の共有

そして、白山麓実習本番ではこれら①②③の解決に寄与する施策として、地元の子どもが園内のオキナグサ育成管理の一部をボランティアの指導の下で行う『キッズマイスター・プログラム』(以下『キッズマイスター』)の導入を提案した(写真12、記事5)。

①について、2014年度のボランティアは地元から集まった10名であったが、全員が60歳以上となっている。白山麓実習の学生を毎年歓迎してくれる地元の高齢者である。子どもとの触れ合いも楽しいはずである。また、子どもの保護者を含め、幅広い世代が園内のオキナグサ保護に関わることで、普段のボランティア活動にはない刺激を生む狙いもある。

②は①に関連して、園内のオキナグサを環境教育の教材として活用するということである。子どもの年齢にもよるが、未就学児であれば初めて園芸作業を行う機会にもなり情操教育としても意味がある。これは2011年度の『キッズすくすく園芸体験』とも共通している。

③は、野上氏、中村氏、ボランティアの間で、あるいはボランティア間において、活動の目的を共有する必要があるということである。例えば、今回の市民参加プログラムの導入が地元紙で報じられた際、野上氏や中村氏は、石川県民にオキナグサの現状を伝えることが出来る、また白山ろくテーマパークの存在価値を高められると記事を歓迎した。しかし、一部のボランティアからは「せっかく育てた園内のオキナグサが盗掘されるかもしれない」と不安の声が上がった。これに対し、野上氏には「園内のオキナグサの盗掘も許されることではないが、園内のオキナグサが注目されることで自生のオキナグサへの関心が逸れるなら、結果としてオキナグサを守ることになる」という考えがあった。園内のオキナグサは、自生のオキナグサの種を白山自然保護センターが採取し発芽させたもので、あくまでも人の手が加わったものである。自然保護の観点から言えば、自生のオキナグサを守ることが最優先であり、一言でオキナグサとはいえ、自生のオキナグサと園内のオキナグサは異なる。実際、手取峡谷のオキナグサは厳しい環境下で岩盤から生えるために大きくは育たない。しかし、園内のオキナグサは花壇の中で、かつ人の手で育てられるため非常に大きく育つ。「自生地に近い形で育てて、白山麓のオキナグサを知ってもらえれば…」と考えていた野上氏や中村氏は、園内のオキナグサの発育ぶりに苦笑するほどである。

いずれにせよ、野上氏や中村氏、ボランティアの間で、オキナグサ保護の考え方、また白山ろくテーマパーク内での市民参加プログラムの目的が

共有されていなかったことは事実である。これは野上氏が講義形式でボランティアを指導する方法が考えられるが、それだけでは①の楽しさ向上の面で疑問が残る。もちろん講義形式が必要な状況もあるが、野上氏ら指導者側とボランティアが双方向的に議論する方が互いの負担感が小さいように思われる。そこで実習生は、『キッズマイスター』をボランティアが計画、準備する過程で、子どもへの指導内容については野上氏が助言を行うという形を考えた。その中で白山ろくテーマパークでの市民参加プログラムの趣旨について、ボランティアの理解を高めていくことが出来るのではないかとすることである。

『キッズマイスター』を白山麓実習で発表した後、この導入が検討された。今年度の市民参加プログラムの回数は残りわずかとなっていたから、導入は次年度に持ち越されるが、『オキナグサ・マイスター制度』の提案から『キッズマイスター』の提案までのおおよそ1年間、問題点の発見(市民参加の難しさ)→解決策提案(『オキナグサ・マイスター制度』)→実践(市民参加プログラムの試験実施)→問題点の発見(上記①②③)→解決策の提案(『キッズマイスター』)というサイクルを辿った。

ここから、市民参加プログラムは長期的なサイクルの中で成長していくもので、明確なゴール、完成形というのは無いように思われる。局面ごとに問題点があり、それを解決する手段を考案して実践するというサイクル自体が、市民参加プログラムを継続して機能させていくことになる。もちろん白山麓のオキナグサ保護においては、自生地保護への市民参加が1つの目標地点ではあるし、そこに至った時には高度な市民参加プログラムが確立されているはずである。

2014年度の白山麓実習の第1の目標は、実際に市民参加プログラムが導入されたことで達成された。しかし、オキナグサ保護への市民参加プログ

ラムに関して、将来的な展望と発展のプロセスを示したことは、目標の達成以上の価値があった。



写真11 ボランティアの作業風景



写真12 『キッズマイスター』発表の様子



記事5 2014年度白山麓実習政策提案発表会の
記事(2014年9月8日北陸中日新聞)

※Ⅳ-1-2『まるっこと白山』に関する記事含む。

Ⅳ-1-2 ソフトクリーム『まるっこと白山』の 商品化

ー市民の共有意識を生み出すためにー

前年の実習時、地元住民から「白山麓を食でPRしてほしい」という依頼があった。これに関心を持った実習生を中心に、提案や試食イベントで完結するのではなく、何らかの地元食材を使用した新商品の開発に取り組もうということになった。

まず、実習生は白山麓の伝統食材(すでに消えつつあるものを含めて)や、その調理方法を調べるとともに、これらを地域弁当に使用することを考えた。地域弁当は地物の食材ばかりを使った弁当で、これを地域おこしに活用している事例がある。この調査内容について書かれた進級論文は総合政策学部の小島奨励賞を受賞している。しかし、実習生の提案について白山市と協議したところ、伝統食材の復活は生物学の分野であるから文系学生が取り組むのは難しいという意見が出された。また、例えば金沢大学の学生が復活させたヘイケカブラは、非常に苦く調理が難しいそうで、「そもそも調理が困難だったり味に難があるから消えていった食材を復活させて販売するというのは非現実的ではないか」という指摘もあった。さらに、弁当には複数の食材が必要になるが、白山麓では安定供給できる地元産の肉類が少ない。食材が限られると旅館などで出される既存の料理と差別化することも難しい。そういうことで伝統食材の復活、地域弁当の案はここで取り下げることとなった。

しかし、白山市からは「若者らしい案を」という助言があった他、協議では「B級グルメ」というキーワードも出てきた。B級グルメであれば、比較的食材の数を抑制できるため、以降、実習生は複数のB級グルメのメニューを考え再度白山市と協議を行った。この協議では、いくつかのメニューは実現性がありそうだということで進んだが、連続して行った地元商工会との協議で

は「高齢の飲食店経営者が多い白山麓で新しいメニュー、しかもB級グルメは理解されにくいのではないか」という指摘を受けた。

ここで分かったことは、地域弁当もB級グルメも、実際に調理し販売する主体に負担をかけるものでは順調に進まないであろうということである。白山市ではすでにジオロールや白山モンブランといったジオパークに由来する菓子類が販売されていたが、商工会によると、菓子店によっては「『市からの依頼があったから』と、受け身で取り組んでいるケースもあるのではないか」ということだった。

白山麓実習が地域貢献活動型フィールドワークであるという趣旨からすれば、地元に負担をかけてまで「商品化」を目指すのは本末転倒である。そこで実習生は、白山麓実習が地域貢献活動であることに回帰し、地元負担を極力抑え、それでいて白山麓をPRする食の提供が何であるかを模索することになった。

こうして誕生したのが、ソフトクリーム『まるっこと白山』(図2)である。

『まるっこと白山』は、ソフトクリームに地元産の栃蜜と砕いたかき餅をかけるだけで完成する。したがって、すでにソフトクリームを販売している店舗があれば、栃蜜とかき餅を購入するだけで販売が可能だ。提供者の負担は非常に小さい。また、『まるっこと白山』は、白山をソフトクリームで、手取川を栃蜜で、岩石をかき餅で表現しており、いわば“ジオソフト”でもある。ジオソフトであれば、白山手取川ジオパークのPRにも寄与することになる。しかし、実習生は『まるっこと白山』を単に白山麓やジオパークのPRを目的にするものではないとした。

『まるっこと白山』はジオパークを表現すると同時に、「栃蜜とかき餅の新しい食べ方」を提案する

ものである。この栃蜜と砕いたかき餅をかける食べ方は、ソフトクリームだけでなく、アイスクリームやヨーグルトなどに応用出来る。こうした食べ方が、白山市民の間で流行すれば、「これを作る人=白山人(はくさんびと)」という“あるある”³¹、すなわち共有意識を生み出すことに繋がる。白山手取川ジオパークが、白山市統合のシンボルで、市民の共有意識の醸成を図る役割を有していることは先に述べたが、これを補完することも『まるっこと白山』の目的だということである。

2度の大きな訂正を経て発表した『まるっこと白山』は、2014年度の白山麓実習の政策提案発表会に集まった約30名の出席者に試食して頂いた(写真13)。試食後にはアンケートによって評価を得た。味や見た目については上々の評価であったが、単価400円と仮定したところ「安い」という感想が約6割、「高い」という感想が約4割と、やや拮抗した。

政策提案発表会後の11月、白山ろくテーマパーク指定管理者から公園内のカフェにて翌2015年の春から『まるっこと白山』を販売したい旨の連絡があった。『まるっこと白山』の販売は、石川県に提出された指定管理者の事業計画書にも盛り込まれ、指定管理者と石川県との約束事になっている。したがって、基本的には商品化、販売開始は決定事項で、2015年度の白山麓実習の第2目標も達成出来たことになる。ただし、2015年の春の販売開始以降、料金設定や販売手法、共有意識の醸成までの広報戦略など、継続して検討すべき点は多い。2015年度の白山麓実習でもフォローしていく必要がある。

31 相槌の1つである。「有る有る」とも。「だよね〜」「あるある〜」などの様に使う。主に相手に同調する意味を持つ。(ニコニコ大百科 <http://dic.nicovideo.jp> 2014.12.10閲覧)

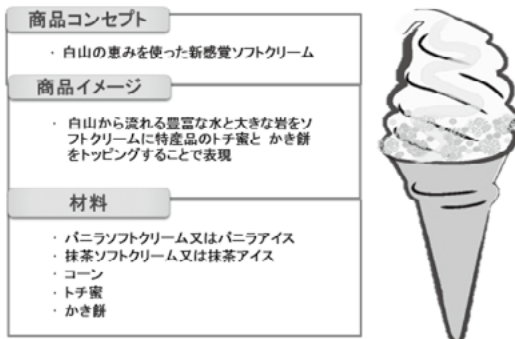


図2 『まるごとと白山』商品概要とイメージ³²



写真13 『まるごとと白山』試食会で地元紙の取材を受ける実習生

IV-1-3 小水力発電を核とした未来里地プロジェクト

ー実習を長期的に考えるー

地域貢献活動型フィールドワークとしての白山麓実習の長期計画、また次年度以降の基本的なカリキュラムとして発表したのが『未来里地プロジェクト』³³である。白山麓吉野地域における『未来里地プロジェクト』は、以下①②③を柱とし、住民が未来に希望を抱ける里地を目指していく構想である(図3)。

- ①小水力発電を核として里地の持続可能性を追求すること
- ②白山手取川ジオパークの推進と連動し地域の

魅力をつくること

- ③環境教育、地域教育の実践により、地域の担い手を育成すること

実習生が『未来里地プロジェクト』を考えるきっかけになったのは、吉野工芸の里の運営に携わっている白山吉野地域振興協議会会長の西出氏から「用水路を使用した水力発電を考えたことがある」という話である。

白山麓実習は、前年から吉野工芸の里を宿泊施設として利用させて頂いたが、この吉野工芸の里を取り巻く状況は決して楽観視出来るものではない。吉野工芸の里は、1985年に旧吉野谷村が中心となって設立した公共施設で、現代工芸の里、ものづくりの里をコンセプトに、作品展示や体験教室などを行ってきた。2005年には白山市に移管され、白山吉野地域振興協議会などが運営を担っている。しかし、白山市の誕生、すなわち1市2町5村の合併は、財政再建を目的にしたものであり、利用者数の少ない白山麓の公共施設は統廃合の流れにのまれることとなる。吉野工芸の里も例外ではなく、施設を活性化させ、存在意義を示すことが白山吉野地域振興協議会をはじめ関係者にとっての課題となっていた。そこで白山麓実習でも吉野工芸の里の活性化策を考えることになり、その議論の中で先述した西出氏の「水力発電」の話が出たわけである。

西出氏によると、吉野工芸の里の近くを流れる用水路の水利権は地元で持っているから、その利用についてのハードルはクリアしている。しかし、石川県内の専門家に相談したところ、小水力発電とはいえ設置には高額費用がかかるとのことで断念していたようだ。ただ、議論の際に石川県内の専門家が提示した金額を聞いてのだが、「もう少し安価で導入出来るのではないか」というのが筆者の率直な感想だった。近年では用水路だけ

32 実習生作成、筆者編集。

33 『未来里地』は実習生が考えた造語。閉塞感の漂う中山間地域が多いが、その閉塞感が期待感や希望に転換されている里地を『未来里地』と呼ぶ。また『未来里地』を目指す構想が『未来里地プロジェクト』である。

ではなく、より規模の小さな、例えば都市公園の流れに小水力発電機を導入し非常用電源にするといった事例もある。つまり発電機はかなり小型のものが存在しているし、その分安価な製品もあると思われた。西出氏の話聞いた後、実習生には小水力発電機の製品を調べてもらった。すると、10万円程度のものから存在していることが分かった。もちろん金額が安いものは発電量も小さいが、そこを工夫して有効に活用する案を考えるのが白山麓実習の役割である。こうして誕生したのが『未来里地プロジェクト』である。

『未来里地プロジェクト』の柱とした①は、小水力発電を核として里地の持続可能性を追求することである。吉野地域全体でのエネルギーの地産池消が目標であるが、まずは吉野工芸の里の非常用電源とする、あるいはイベント時にのみ使用するといった形で、限られた電力量を有効に活用し、小水力発電の啓発を図っていく。そうすることで賛同者が増えれば、新たな動きが生まれる可能性があるし、段階的に発電機の数を増やすなど、エネルギーの地産池消が可能な里地、持続可能な里地づくりを目指していく。

②は、ジオパーク推進と連動し地域の魅力をつくることである。白山手取川ジオパークのテーマに「いのちを育む水の旅」とあることはⅢ-1で述べたが、『未来里地プロジェクト』が前進すれば、新たな水の恩恵が小水力発電を通して人の生活にもたらされる。その意味で、白山市のジオパーク推進室と吉野工芸の里の連携を強化し、ジオツアーやジオパーク関係のイベントにおいて吉野工芸の里の存在感を高めていきたい。これは吉野工芸の里の集客力を高めることだけでなく、『未来里地プロジェクト』を知ってもらい、地域の魅力を伝えることにも繋がる。

③は、環境教育や地域教育の一環として小水力発電やジオパークを利用し、地元の子どものふるさとへの誇りと愛着を育てることである。将来的

に地域の担い手となる若者の確保に繋げていきたい。

以上のように、小水力発電、ジオパーク推進、吉野工芸の里の活性化や地域の魅力づくり、集客力の向上、また環境教育や地域教育を組み合わせ、『未来里地プロジェクト』を前進させていく。しかしながら、①②③いずれも気の長い取り組みが必要である。だからこそ、白山麓実習が長期的に関わる計画として、現地で発表することにしたわけである(図4)。

発表後は質疑応答に加えて、出席していた白山市、白山吉野地域振興協議会、吉野工芸の里作家の会、金沢庭材(株)、地元の青年団や婦人会、市民団体ツナグ白山麓の関係者に実習生を含めた約50人で座談会を開催した(写真14、記事6)。そこでは『未来里地プロジェクト』また吉野工芸の里のあり方について様々な議論が交わされた。この議論を踏まえ、翌2015年度の白山麓実習では『未来里地プロジェクト』の第1弾として小水力発電を活かした環境教育イベントや夜間コンサート、吉野工芸の里の作家に四季折々のランプシェードを作製してもらい近隣の集落を灯すことを計画している。

余談になるが、この座談会は地元の参加者から予想以上に喜ばれた。特に白山市の職員を前にして、地元の参加者の発言には熱がこもっていたように思われたし、『未来里地プロジェクト』の発表についてだけでなく白山麓や吉野地域の現状に関しても制限時間を超えて語らいが続いた。実習生とともに座談会を進行して下さった白山吉野地域振興協議会の事務局長の西田公一氏はじめ複数の参加者が「来年もぜひやりたい」と仰っていたのが印象的だった。

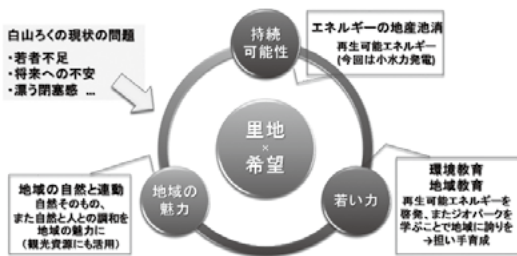


図3 白山麓吉野地域における『未来里地』イメージ図³⁴

	1年目 150w	～2年目 300w	～3年目 450w	～4年目 600w	～5年目 900w	6年目以降 1200w～
ライトアップ	150w	成瀬展示作品	彫仏供祀	工芸の展示体		
作家企画	作家×ランシェード企画			ランシェード×屋外ライトアップ		
コンサート	チェンバロ×光の音楽会			光の音楽会バージョンアップ		
発電計画				発電検討	可能なら発電	
出資企業	出資			イベントスポンサーとして地域で名声得る		
白山吉野地域 振興協議会	発電機の管理、イベント運営全般および集客			左記の拡大		
目標来場者数	500	1500	3000	4500	6000	

図4 白山麓吉野地域における『未来里地プロジェクト』年次計画³⁵



記事6 『未来里地プロジェクト』発表の記事
(写真は座談会の様子 2014年9月7日北陸中日新聞)



写真14 『未来里地プロジェクト』発表の様子

Ⅳ-2 「卒イベント」を模索した実習生

地域に根付く実習成果を求めた2014年度の実習生は、「卒イベント」にこだわって実習に臨んだ。市民参加プログラムの導入、商品化の実現、また白山麓実習の長期計画の発表は、それぞれ関係機関との緊密な連携や意見交換の上に成し遂げたものである。しかし、その中で、過去3年間の実習では毎年聞かれた「学生だからこそ成功させられた」といった評価を現地から頂くことがなかった。

イベントの成否は、おおよそ実施当日の参加者の様子を見ていれば分かる。特に満足度調査が必要というものでもない。そのイベントが都市公園の活性化やジオパークの推進にどの程度貢献したのかに関しては十分に検証を加えなければならないが、イベントそのものの成否は「参加者が楽しんだか」「また参加したいと感じているか」といっ

34 実習生作成、筆者編集。

35 実習生作成、筆者編集。

た部分が問われる。一方で、「卒イベント」で臨んだ2014年度の白山麓実習は、実習期間中に成否が分かるようなイベントを行わなかった。『未来里地プロジェクト』は言うまでもないが、市民参加プログラムの導入や新商品の開発も、今後一定期間運用あるいは販売された上で成果を検証しなければならない。地域貢献活動としては単発のイベントよりも地域に根づく活動の方が成果は大きい、それはあくまでも実習期間外も運用され、販売されるからで、2年間しか白山麓に関わる事が出来ない実習生にはその成果を実感として捉えにくい。

また、実習期間外も運用され、販売されるということは、それを行うのは実習生ではない。白山自然保護センターや指定管理者、あるいはボランティアである。したがって、イベントの様に「学生だからこそ成功させられた」という評価がないのは当然である。

イベントには一種の派手さがあり、実習生の瞬間的な達成感は大い。しかし、実社会において提案した内容を実現させ、これを継続的に運用していくというのは、常に修正や調整を必要とするもので地道な作業となる。例えば、『オキナグサ・マイスター制度』は市民参加プログラムとして導入されたが、局面ごとに問題点があり、その解決策を探っていかなければならないという意味でゴールのない取り組みとなった。ゆえに2014年度の白山麓実習は、達成感を感じにくいという点で過去4年間と比べ実習生には厳しい内容になったかもしれない。しかし、実習成果の定着という目標に向けて忠実に行動した実習生は評価されるべきだし、3つの具体的な目標を達成したことは地域貢献活動型フィールドワークとしての白山麓実習の意義を高めた。また、実社会に身を置いて体験するという学びの面での成果は、これまでに大きかったのではないだろうか。

Ⅳ-3 定着しつつあるパークウェディング

実習そのものではないが、2014年度は白山麓実習に関連して特筆すべき出来事があった。

2010年度の実習1年目、実習生が白山ろくテーマパークの活性化策としてパークウェディングを提案したことはⅡ-1で述べた。リサーチ・フェアのポスター部門で奨励賞を受賞したものの、翌年試験導入されたのは別の実習生が発表した『キッズすくすく園芸体験』となり、実行の機を逸していたパークウェディングである。

それから4年経った2014年5月、パークウェディングを提案した高橋美香(旧姓：和田)さんは、自らの結婚に際し白山ろくテーマパークで結婚式前撮りを行った(写真15)。卒業論文もパークウェディングをテーマに書き上げた彼女は、この分野の専門家である。公園を占有することがないよう他の来園者と同じ様に公園を利用しながら撮影する計画を立てた。もちろん彼女の計画と行動力だけではなく、金沢市の衣装業者や写真家がパークウェディングの趣旨に理解を示し支援してくれたし、彼女を学生時代から見守ってきた白山ろくテーマパーク公園所長の中村氏の献身的な協力があって実現したことである。

この前撮りの様子は、地元紙の地域欄でトップ記事となり(記事7)、白山ろくテーマパークの利用効果を高めただけでなく、白山麓の自然の美しさや人の温かさを伝えることにもなった。また、撮影中には多くの来園者が花嫁と花婿に祝福の言葉を送り、写真撮影する様子も見られた。高橋さんは自らの行動で、2010年度の政策提案発表会の中で述べた「パークウェディングは人間行動によって景観美を生む」という仮説を証明したのである。

さらに驚いたことは、この前撮りから2か月後、地元の写真家から白山ろくテーマパークで模擬結婚式を行い、撮影をしたいという申し出があっ

た。新聞記事を見て、白山ろくテーマパークに連絡したとのことであった。この模擬結婚式も10月に行われ、以降結婚式のパンフレット撮影などが度々行われている。

2014年度の白山麓実習は、実習成果を地域に根付かせることを目標とした。しかし、実習本番の4か月前に、4年前の実習生の提案内容が定着しつつあったのである。今後どのような展開を見せるのか、あくまでも都市公園の活性化策として行うのであれば指定管理者の腕の見せ所である。他方、



写真15 実習卒業生、高橋さんの結婚前撮り写真(白山ろくテーマパーク ロックガーデンにて)



記事7 白山ろくテーマパークでの結婚前撮りの記事(2014年5月10日北陸中日新聞)

横浜市のように自治体が政策としてパークウェディングを推進するケースも見られる。地域の新たな魅力創造に繋げるのであれば、石川県や白山市の姿勢にも注目する必要がある。

IV-4 考察

2014年度の白山麓実習では、白山ろくテーマパークのオキナグサ保護活動のための市民参加プログラム導入、ソフトクリーム『まるっこと白山』の商品化、地域貢献活動型フィールドワークとしての長期計画『未来里地プロジェクト』発表を目標とし、それぞれ達成することが出来た。

しかし、IV-2で述べたように2014年度の実習生はイベント成功時のような明確な達成感を味わう機会がなかった。白山麓実習を継続して行うためには、地域貢献活動として成果を上げる一方で、実習生が達成感を得ながらモチベーションを高めていくことも重要である。インターンシップとしての体感や学びに関しては、実習成果を根付かせるという過程(プロジェクト)においてこれまで以上の収穫を得たと思われるが、それはイベント成功時に得られる達成感とは異なる。実社会に入り込んで学生主体で地域貢献活動を成し遂げていくことは容易ではない。したがって、それに挑み、成し遂げた実績は、何らかの形で評価し、達成感を得られるような仕組みを設ける必要があるように思われる。この点は、現地の関係機関と相談し2015年度に向けて方法を考えていきたい。

また、『未来里地プロジェクト』のような長期計画が、実習の自由度を低下させることが懸念される。これまでは現地からの要請や、学生の関心事項に比較的柔軟に対応していた白山麓実習であるが、今後は長期計画だけでなく市民参加プログラムの運用や『まるっこと白山』の販売にもフォローが求められる。これについては継続的に関わるものと、そうでないものを区分し明示しなければなら

らないと考えている。それにより一定の時間や労力を確保し、現地の要請や学生の関心事項に応えられるようにしたい。

さらに、地域貢献活動として、より大きな成果を上げるためには、現地を訪問する回数を増やし、実習期間を出来るだけ長く取れた方が良い。これまでは5泊6日を基本として夏季休暇中に行ってきたが、2015年度からは就職活動の時期が8月に後ろ倒しされ、夏季休暇中の実習実施は困難と予想される。その場合、夏季休暇中以外に行くこととなるが、白山麓実習のみならずフィールドワークは現地の関係機関との日程調整が欠かせない。特に白山麓実習の関係機関は産官民学様々である。したがって、学生側の都合(大学の休講中)を優先して実習を行うのは非常に難しく、無理に実施すれば現地に迷惑をかける恐れもあり、地域貢献活動が本末転倒になってしまう。関西学院大学 総合政策学部は、フィールドワークを重視しているとパンフレットやWebサイトで紹介し、学部の魅力としてPRしているわけだから、公欠の扱いをフィールドワークにも適用することを検討してはどうだろうか(もちろん活動レポートなどの提出を条件として)。こうした処置がなければ、就職活動が夏季休暇中にあたる2015年度以降、4回生のフィールドワーク参加、実施が相当困難な状況になると予想される。

次年度に向け、実習に対する評価のあり方、実習内での時間や労力の配分、総合政策学部との意思疎通をどのように考えていくべきか、これらの課題が見えた2014年度の白山麓実習であった。

V. まとめ

V-1 大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義

関西学院大学のスクールモットー“Mastery for Service”は「奉仕のための練達」と訳され、隣人・社会・世界に仕えるために自らを鍛えることとある。³⁶ 白山麓実習をはじめ久野ゼミの実習(現在は佐山ゼミで発展的に引き継がれている)は、現地現場に還元(プロジェクト実習)するための体験(インターンシップ実習)であり、まさに「奉仕のための練達」である。また、総合政策学部は“Think Globally. Act Locally.”をモットーとした総合的かつ専門的な教育研究を行うとしている。³⁷ 自然保護や中山間地域の活性化という大きな問題を、現地現場である国立公園や都市公園あるいは1つの集落に身を置いて考える地域貢献活動型フィールドワークは総合政策学部のモットーを体現するものである。このように関西学院大学 総合政策学部から見た場合、地域貢献活動型フィールドワークの意義は比較的容易に示すことが出来る。

他方、関西学院大学 総合政策学部の枠外から見た場合、地域貢献活動型フィールドワークは大学教育においてどのような意義を持つだろうか。学校教育法83条以降、大学教育についての定めがあるが、筆者は現役の企業人であるから、あえてその立場から述べる。

白山麓実習を指導してきた筆者が、大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義について述べようとすると、真っ先に思い浮かぶのは「やってみなはれ。やらせてみなはれ」という台詞である。サントリーグループの創業者である鳥井信治郎氏の口癖であったそうだ。「やらなわか

36 関西学院大学Webサイト <http://mobile.kwansei.ac.jp/kikaku/> 2014.12.10閲覧

37 関西学院大学総合政策学部Webサイト <http://www.kg-sps.jp/about/> 2014.12.12閲覧

らしまへんで」と結ぶこの台詞は、調査や分析で終わらず、提案し、実行することの大切さを教えてくれる。実際のところ実行しないことには効果は分からない。「論より証拠」である。地域貢献活動型フィールドワークは「やってみて、知る」実験または体験であり、この点は大学教育における意義の1つといえよう。

2つ目は、端的に言って「社会勉強になる」ということである。

大学教育と一口に言っても、これは時代とともに求められるものが変わってこよう。大学進学率は1990年25%程度だったのに対し、以後20年間で50%程度に向上している。³⁸ 地方の中小企業で従業員10名程の当社でも、2014年現在はほとんどの従業員が大卒者である。20年前には大卒者が0名だったことを思えば、大きく様変わりした。理由として大卒者が増えて採用しやすくなったということがあるし、業界内で大卒者が増える中で「当社も」という流れが大きい。当然、大卒者は最高学府で培った優れた能力を持っているものと期待している。しかしながら、実際には人間関係を良好に作る力、前向きに仕事に取り組む力、ストレス耐性や状況を察する洞察力といった、いわば社会人としての基礎力がまずもって求められる。大卒者には、大学で培った論理的思考力で精度の高い調査や分析を行い、その結果を活かす手法を提案してもらいたい。ただ、社会人として基礎力の面では、高校や専門学校を卒業して社会人になった従業員に一日の長がある。今や大卒者が珍しい時代ではない。実社会では大卒者を特段差別化しない場面が増えている。ゆえに大学教育においては、大学ならではの「社会勉強」の在り方が問われていると考えるべきであろう。

これまで述べた通り、白山麓実習がインターンシップ実習、プロジェクト実習、さらに地域貢献活動型フィールドワークとして発展してきた中

で、実習生にはインフォーマントとの密接な人間関係づくりと情報収集、地域の歴史や文化あるいは統計資料の調査、そこで発見した問題の解決策を考える時間が与えられた。また、その問題解決策を実行に移すべく、実習生が核となって産官民学連携の体制を構築する過程があった。そして、実習成果を地域に根付かせるために施策の継続運用の方法を模索してきた。これらは、多くのアルバイトに見られるルーチンワークとは一線を画すもので、大学ならではの「社会勉強」といえる。

以上の通り、大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義を示した。

今後、地域貢献活動型フィールドワークの充実を図ることが、大学あるいは学部における重要な課題になるのではないだろうか。

下記に白山麓実習卒業生のコメントを加えておく。これは2014年8月に行われた関西学院大学のオープン・キャンパスで、白山麓実習の実習生が総合政策学部のフィールドワークを紹介するにあたり、卒業生に行ったインタビューの内容(抜粋)である。

Q1. 白山麓実習で学んだことは何ですか。

Q1-A1 「社会人との接し方、伝え方という点で、相手の立場を考えること」(2013年度卒O)

Q1-A2 「伝達力。一方的に伝えるのではなく、聞き手の状況やタイミングを合わせ、的確に自分の言葉を伝えること」(2012年度卒KI)

Q1-A3 「頑張っている姿には人を動かす力があること」(2011年度卒T)

Q1-A4 「学生と社会人が意見交換、交流し合える点で、自らのスキルアップとしてコミュニケーション能力を向上させられた」(2012年度卒KM)

Q1-A5 「たとえ学生でも、現場では社会人と

して社会人目線で仕事をするということ。またメールの送り方や話し方や態度など、社会人から見られて納得のできる対応や仕事の仕方」(2011年度卒WMI)

Q1-A6 「責任感と達成感」(2011年度卒WMA)

Q1-A7 「論理的思考。どのような背景/課題があり、そのために何が必要とされるか、その中で自分たちが打ち出せる解決策は何か、逆に自分たちじゃないとできない解決策は何か、それらを1つずつ紐解いていく作業」(2012年度卒T)

Q2. 実習での経験が、今に生かされていると思うことはありますか。

Q2-A1 「礼儀作法。内定時代にお礼のメールが漏れなく出来ていると採用して頂いた当時の人事課長から褒められた」(2012年度卒KI)

Q2-A2 「組織内での協調性や気配り、目配りを意識しながら行動できるようになったこと。また、営業職に就いた今、人(お客様)のために何ができるか自らが知恵と工夫を絞り計画を立てて行動(考動)できるようになったこと」(2012年度卒KM)

Q2-A3 「会社での言動や仕事の基本的なやり方(メールは遅くとも翌日には返すなど)」(2011年度卒WMI)

Q2-A4 「周りをよく見るようになったこと」(2011年度卒WMA)

Q2-A5 「実習を通して学んだことから造園の道に進んだ。実習は人生の大きなターニングポイントの1つ」(2012年度卒T)

Q2-A6 「学ぼうとする意識次第で、得られるものには差がでること。また仲間とたくさんぶつかって、意見を出しあって、考えて、行動していくこと」(2012年度卒O)

V-2 フィールドワーク活性化のために

大学教育における地域貢献活動型フィールドワークの意義についてはV-1で述べたが、5年間の白山麓実習の指導を通し、筆者がフィールドワーク活性化のために大学または学部に見込むことを記しておく。

第1に、学生への経済的な支援である。白山麓実習は実習生1人当たり3万円程度の旅費がかかる。2012年度から2014年度は総合政策学部研究会の学生地域貢献活動等助成金より年間10万円の支援を受けおり、これにより実習生が10名であれば1人当たり1万円程度の還元が可能となる。しかしながら、現地への下見など、実習以外のタイミングで現地を訪れることもあるため、さらなる経済的な支援があれば有難い。例えば、大学が保有している大型車両(10人乗りバン)を拝借出来れば、レンタカー代10万円程度が不要となり、実習生の負担はさらに軽くなる。なお、久野、佐山両ゼミに所属する実習生には、ゼミ費から1人当たり定額5千円の補助がある。一方で、久野、佐山両ゼミ以外の実習生は、この5千円の補助が削られる。今後、白山麓実習を学部横断的に実施するにあたっては、ゼミ費の充当金額を参加している実習生の中で平準化して還元するといったことも検討すべきであろう。

第2に、リスクについてである。学内から離れるフィールドワークには相応のリスクが生じる。これまでレクリエーション保険、自動車保険などでリスクヘッジはしているものの、フィールドワークのリスクマネジメントについて、大学がガイドラインを明示することは難しいのだろうか。ガイドラインがあれば、フィールドワークを指導する教員、学生や保護者にとって、実施、参加のハードルが下がるものと思われる。

第3に、指導者の確保である。白山麓実習がそうであるように、フィールドワークは継続して実

施することで、現地現場のインフォーマントとの人間関係や、産官民学連携の体制が構築され活動が拡大していく。しかしながら、実習生は数年で卒業となるため、この人間関係を維持するのは指導者の役割になる。白山麓実習の場合、その役割を筆者が担っているが、仮に筆者が急病にかかった場合、実習は決行できるのだろうか、いささか不安を覚えたことがある。そうなれば現地現場にも迷惑をかけることとなり、大学内の問題だけではなくなる。そこで、フィールドワークを実施する場合には、担当教員と責任教員、あるいは担任と副担任というように、2人体制の指導スタイルを構築しておくべきであろう。

第4に、学内での評価のあり方についてである。白山麓実習の関係では、5年間でリサーチ・フェアの受賞が2回(口頭部門優秀賞、ポスター部門奨励賞)、SPSアワード ベスト・コントリビューション受賞が1回、小島賞奨励賞の受賞が1回あるが、これらはSPSアワード ベスト・コントリビューションを除いて研究発表としての評価である。研究発表として評価を得ることは重要だが、フィールドワークの場合、インフォーマントとの人間関係をどう構築したか、あるいは活動の中でどんな苦労があったかといった、フィールドワークの基盤づくりなどに関しても「体験がごく少数の参加者の中だけで共有」³⁹されることにならないよう広く学内に伝える必要があろう。しかし、研究発表としてのポスター、プレゼン、論文では伝えられない部分が多い。また、研究発表の枠の中で、限定的な伝達情報のみで評価が下されるとすれば、フィールドワークに一生懸命取り組んできた実習生にはやや気の毒な面がある。なお、リサーチ・フェアには自由形式発表があり、こちらはフィールドワークの発表には適しているが、受賞対象外となっている他、2013年度に発表した際には先生方の閲覧が少なかった。また、SPSア

ワード ベスト・コントリビューションは、受賞が個人名となる点で、地域貢献活動の実体とは必ずしも合致しない。そこで、受賞の有無はともかく、フィールドワーク報告会とでもいうべき、フィールドワーク参加者の情報交換会をゼミ横断で開催してはどうだろうか。

第5に、実施時期の問題である。IV-4で触れたが、フィールドワークはあくまでも現地現場の受け入れや承諾があって実施出来るものである。大学側の都合が優先されるわけではない。したがって、大学休講中に実施期間が限定されてしまうのは、フィールドワークを大きく制限することになる。例えば、先に触れた学生地域貢献活動等助成金の対象となる活動には条件付きで公欠を認めるなど、柔軟な対応があって然るべきではないか。検討を要請したい。

おわりに

2015年度から白山麓実習は総合政策学部2回生以上を対象とした演習に組み込まれることとなった。本報告の内容を振り返り、これまで以上に実習生にとって学びの大きい活動にしなければならないと責任を感じているところである。それと同時に、まだ見ぬ新しい実習生と、ともに頭を抱える日々が楽しみである。2回生には少し敷居が高いかもしれないが、積極的に、勇気をもって参加してもらいたい。

白山麓実習は、これからも「やってみなはれ」の精神で、地域貢献と学びのフィールドワークを追求していく。筆者自身も、その活動を指導する者として全力を尽くす覚悟である。

最後に、本報告の執筆ならびに5年間の白山麓実習を支えて頂いた皆様に心より御礼を申し上げます。

39 脚注2に同じ。合わせて久野教授の筆者への指導から。

石川県土木部公園緑地課、石川県石川土木総合事務所、石川県白山自然保護センター、石川県白山ろくテーマパーク指定管理者、白山市観光文化部ジオパーク推進室、白山手取川ジオパーク推進協議会、白山吉野工芸の里、金沢庭材㈱、市民団体ツナグ白山麓、その他関係機関のすべての皆様、そしてたくさんの白山麓の住民の皆様のご理解とご支援には、感謝の言葉もございません。2015年度以降も継続してご高配を賜りたく何卒宜しくお願い申し上げます。

また、総合政策学部の先生方、事務室の皆様にも日頃から温かく背中を押して頂いております。とりわけ久野武教授には白山麓と筆者の縁を作って頂きましたし、佐山浩教授にはその縁を育てて頂いております。心から感謝申し上げます。

そして、白山麓実習の卒業生の皆さんは、現在も陰に日向に筆者を支えています。本当に有難うございます。どうかこれからも白山麓実習と後輩たちを宜しくお願い致します。